
進路教育部会

一人一人にあった、生きる力をつけるためのキャリア教育はどうあるべきか

～小・中における授業実践を通して～

I 研究の内容

1 研究方法

- (1) 各小中学校での「進路指導」関連の実践や資料を持ち寄り、発表し協議する。
- (2) 公立高校入試制度改革後4年が経過する中で、入試における現場での課題点を各中学校でまとめ、県教研などの機会を捉え、各方面に報告する。
- (3) 研究テーマに沿った授業実践を小中1授業行い、研究討議をする。また、小中学校の連携の形を模索し実践する。
- (4) 県外のキャリア教育推進校の授業参観を行い、部会研究の方向性を探る。

2 研究の具体的内容

(1) 実践・資料発表

- ア 松里小・・・児童会での取り組み（友達との関わり・地域との関わり）
「ころ柿旬間」の取り組みの様子
- イ 大和中・・・国研アンケート集計結果の考察
- ウ 塩北中・・・2年生職場体験学習（職業調べ学習について）
- エ 笛川中・・・2年生職場体験学習（体験報告会を小中連携の場で実施）
- オ 八幡小・・・書籍紹介（フリーターになる前に読む本）
- カ 松里中・・・職業感を問うアンケートの集計結果についての考察
- キ 勝沼中・・・農業体験学習事後アンケートの考察

(2) 公立高校入試制度（前期・後期入試）の課題点

- ア 各中学校で全員を対象に、同一項目をアンケート形式で回答、集計する。
- イ アの集計結果を持ち寄り、内容について協議し、部会としてまとめ直す。
- ウ 県教研において、持ち込み資料として提示し、意見交換をする。

(3) 授業実践

- ア 大和中（古屋友香教諭）・・・職場体験学習後の報告会指導から
- イ 松里中（中村英彦教諭）・・・中学校生活を先輩（中1）に聞く会の指導から

(4) 県外視察研修

- ア 千葉県印旛郡栄町立栄中学校授業公開への参加
- イ 地元企業（日本食研）・保護者と連携した職業体験の発表会

II 成果と課題

1 成果を中心に

(1) 各校の実践・資料発表から

- ア 職場体験は多くの中学校で実施されている。生徒の希望から職場を選択していくことが多いが、逆に意とは違う職場や別の職種を経験することで、「学ぶ」ことや「可能性を広げる」こと「興味関心を高める」ことになる。
- イ 職場体験後のプレゼンテーションを、小学生を招いて行う実践は小中連携の一例となり今後につながる。
- ウ 中学生の職業感や農業体験の感想から、勤労の大切さ・達成感・喜び・伝統を守ろうとする心、夢と現実にとまどう姿などを知ることができた。

(2) 公立高校入試制度（前期・後期入試）アンケート集計から

- ア 前期入試の面接・作文内容の実例や、選考基準，前期入試結果後の生徒の学習意欲や生活状況の変化などの意見交換ができ有意義であった。

(3) 統一授業研究での授業から

- ア 少人数の学級の利点を生かした，一人一人が互いの考えを尊重しあう授業であった。付箋紙の有効利用，円座での授業形態などを通して，「何を学ばせるのか」が明確な，ていねいな事後指導となった。県教研での発表も高い評価を得，昨年に引き続き全国研へのレポート提出となった。少人数・幼い頃からの変わらない人間関係などの影響で不足しがちな緊張感や授業規律，コミュニケーション能力のより一層の向上を，基本的な生活習慣を含め指導していきたい。
- イ 昨年卒業の中一の生徒（児童会経験者）を二名ずつ4班に招き，「中学校生活の不安」などを質問するという，時を得た授業内容であった。中一生徒が事前に目的をよく把握し生き生きと活動しており，質問がとぎれることなく有意義な時間となった。小中学生共に成長の機会となった。児童生徒による小中連携の実践として意義深い取り組みであった。授業最後に中一生に「卒業を間近にした小六生へ伝えたいこと」など思いを語る時間を与えてもよかった。

(4) 県外視察研修から

- ア 本県公開との違い，生徒の様子，企業連携の公開内容，リクルート社の協力など今後のキャリア教育の一つの形を参観でき有意義であった。

2 全体を通して

- (1) 部会員構成として小学校の先生方に多く参加してもらい，小中連携について今後も模索していきたい。その点から考えて進路教育の部会名はどうだろうか。
- (2) 進路指導・キャリア教育の意義や目標など理論的なことを学びあい，共通理解の中で研究推進ができるとよい。
- (3) 今後も高校入試の課題については継続してまとめていく。 （部長 反田 禎）